

*注意、本書をお読みになる前に

本書は、史実を基に艦娘で表現した本となります。具体的な時間が書かれているシーンは史実のエピソードですが、それ以外の部分は創作したものです。

また、各種設定は基本艦これ準拠とするので、一部当時の日本の技術水準とは異なる描写がありますので、ご了承くださいませ。

作中での時間は注意事項がない限り、基本的に日本時間とします。

史実を基にしている関係上、直接的または間接的な艦娘の死亡描写があります。

艦娘の年齢は具体的には明記していませんが、モデルとなった艦の艦齢に準拠します。

一部を除き、艦これ未登場艦娘には台詞がありません。

本書をお読みになる際は、以上のことにご注意していただければ幸いです。

赤き旭日の城

目次

序章

ニイタカヤマノボレーニ〇八 6 P

第一章

永訣と受難の日々 7 P

第二章

ハワイ作戦～トラ・トラ・トラ！～..... 20 P

第三章

ミッドウェー作戦～慢心の果てに～..... 38 P

最終章

いつか逢えるその日まで..... 67 P

後書き 70 P

序章・ニイタカヤマノボレ一二〇八

『ニイタカヤマノボレ一二〇八』ね」

昭和十六年十二月二日二〇〇〇。太平洋を東へ航行中の私は、聯合艦隊からの電文を受信しました。

「赤城さん、『ニイタカヤマノボレ』で間違いないのよね？ 『ツクバヤマハレ』ではないのね」

「ええ。十二月八日午前零時以後戦闘行動を開始すべし。それが聯合艦隊からの命令よ」

私の後方を航行中の加賀に、はっきりとした声で伝えました。米国との開戦を決定した暗号電文が送られて来たことを。

「そう。交渉は決裂したのね」

これで戦争は不可避。だけど、ぼそつと呟く加賀の表情には、悲観的な感情は一切込められていませんでした。

それもそのはず。私たちはみな、米国と戦争をする覚悟を持って出港したのですから。ここでもし引き返

せと命令された方が、寧ろ落胆すべきことです。

「機動部隊各艦に伝達します！ 本日二〇〇〇。聯合艦隊より、『X日ヲ十二月八日トス』との電文が送られて来ました！！」

私が開戦決定を伝えた瞬間、機動部隊には一斉に歓喜の声が溢れ出ました。みんな米国との戦争を行うため、日々猛訓練を重ねて来たのですから。これでようやく腕を振るうことができるぞと、誰も彼もが闘志をたぎらせるのです。

「目標、米国ハワイ真珠湾！ 機動部隊、抜錨！！」

そうして私のかけ声の元、機動部隊の艦娘たちは一糸乱れぬ航行序列を組みながら、一路真珠湾を目指すのでした。

（天城姉さん、見ていますか？ 赤城はこれより米国との決戦に臨みます。どうか遠き地で、私たちを見守っててください……）

私は天空を眺めながら、心の中で祈りました。数奇な運命に翻弄され、艦娘として生きることが叶わなかった姉、天城に想いを馳せながら……。

第一章・永訣と受難の日々

八八艦隊。それは戦艦八隻、巡洋戦艦八隻から成る、次代を担う大日本帝國海軍主力艦艇を建造するという、夢の計画でした。この計画において、私は天城型巡洋戦艦二番艦赤城として、呉海軍工廠で艦娘としての建造が進められていました。

天城型巡洋戦艦は、長女である天城に、次女である私。それに三女愛宕、四女高雄の計四人の艦娘で構成される予定でした。

……ですが、大正十一年に締結されたワシントン海軍軍縮条約により、主力艦艇は大幅に制限されることになりました。

八八艦隊のうち、建造や保有が認められたのは、長門型戦艦の長門と陸奥のみでした。他の艦娘たちは廃艦や建造中止を余儀なくされました。夢の八八艦隊は、夢のまま終焉したのでした。

私や姉も廃艦の運命を辿るものかと思われましたが、

航空母艦へ改造されることで、廃艦を免れることができました。

妹二人は残念ながら廃艦処分が下されましたが、それでも姉が残されたことは、私にとつて救いでした。

早く竣工して姉と共に航海したい。そう心の内に思いつながら、工廠での日々を過ごしていました。

……ですが、僅かに残った希望さえも失ってしまう事態が発生してしまつたのです。

大正十二年九月一日十一時五十八分。相模湾沖を震源とする大規模な地震が発生しました。死者行方不明者十萬五千人以上。後に関東大震災と呼ばれることになった日本最大級の震災は、私たち姉妹の運命さえ変えてしまつたのでした。

「そんなっ!?!? 姉さんが!?!?」

震災の被害で日本中が混乱している中、私の元に通の悲報が届きました。

それは、横須賀海軍工廠で建造中だった姉の天城が、震災被害で大破したというものでした。姉は脊髄を著しく損傷し、回復は困難であるということから、無情

にも廢艦処分が下されたのでした。

「どうか、一目姉に！」

私は上層部に必死に訴えました。廢艦処分となる姉に、せめて一度会わせて欲しい。このまま顔すら見ずに今生の別れとなるのは嫌だと。

その願いが届き、私は横須賀に赴けることになりました。もつとも、この時の私はまだ進水すらしていなかったで、自ら海を渡るのではなく、関東方面に救援物資を送る輸送船に乗る形での移動となりました。

「酷いわ……」

横須賀軍港に近づくに連れ、震災の惨状が目に見え、私は言葉を失いました。亀裂の入った道路。倒壊した数々の建物。震災から数日しか経っていない街の光景は、地獄としか言いようがありませんでした。

神奈川方面では津波が発生したということで、海面には瓦礫が所狭しと浮遊している有様でした。地震による揺れの恐怖に脅えながら津波に飲み込まれる絶望感は、筆舌に尽くし難いものだったことでしょう。

「姉さん！ 天城姉さん!!」

姉は横須賀鎮守府の海軍病院に収容されたと話を聞き、私は軍港に着くや否や、姉の名を叫びながら駆け足で病院へと向かいました。

「姉さん……そんなっ！」

病室の扉を勢いよく開け中に入ると、そこには全身を包帯で覆われた、見るも無残な姉の姿がありました。心待ちにしていた姉との邂逅がこのような形ではか実現できなかったことに、私は口元を手で覆いながら悲しむことしかできませんでした。

「姉……さん……？」

私の悲痛な声に反応して、姉は包帯の隙間から漏れる唇を、僅かに動かししました。

「はい……!! 私は天城型航空母艦二番艦赤城。あなたの妹です、天城姉さん!!」

私は涙声で自己紹介すると、覚束ない足取りで姉のベッドへと近付きました。

「そう……あなたが……赤城。私の、可愛い妹……」

姉が私が赤城であると分かると、儂げな顔で微笑してくれました。

「姉さん、姉さん……」

不自由な五体になつても私との出会いを喜んでくれる姉の優しさが心に響き、私は包帯が巻かれた姉の右手を優しく握りながら、今まで押し留めていた涙を一気に流し出してしまつたのです。

「赤城、泣かないで……。綺麗なあなたの顔が台無しになつちゃうわ……」

「姉さん！ でも、でもっ……!!」

「ごめんなさい……。本当はあなたの頭を優しく……撫でてあげたいのだけれど……。私はもう指一本すら動かさないわ……」

「姉さん……」

脊髄の損傷により、姉は首から下が一切動かせない容体だとのことでした。可愛い妹の頭を撫で上げることすら叶わない身体に、姉は悲しい表情を浮かべました。

「でも……解体を待つ身だつた残りの人生の中で……あなたに会えたのは唯一の幸福……。これで心置きなく、旅立つことができるわ……」

「嫌、嫌っ！ たつた一度しか会えずに永訣の時を迎えなければならぬなんてえ……」

病室を離れば、二度と姉と会うことは叶わない。ようやく会えた姉と離れ離れになりたくない。このまゝ時が止まつてしまえばいいのにと、私は子供のよう泣きじゃくりました。

「いい？ 赤城……。私は天城……。天空のお城……。その名のように、ずっと天空であなたを見守っているから……」

だからあなたは一人ぼっちじゃないと、姉は私を必死に励まそうとしてくれます。

「そしてあなたは赤城……。赤き城……。赤は誇り高き大日本の御旗、旭日旗の色……。その名のように赤き旭日の城として、機動部隊を支えていくのよ……」
あなたが私の分までも活躍してくれることが最後の願い。姉は私の名を称賛しつつ、自分の願いを託してくれました。

「姉さん……。分かりました。天城型二番艦として、立派に軍務を果たしてみせます！」

私は姉の右手をゆつくりとベッドに戻すと、涙を袖で拭いながらすすくと立ち上がり、毅然とした姿勢で敬礼しました。

「凜々しいわよ……赤城……。これで思い残すことはもう……さようなら、赤城……。私の可愛い……たった一人の妹……」

「!? 姉さん! 姉さん!!」

私は再び手を握り、悲痛な声で呼びかけました。でももう、姉が目を覚ますことは二度とありませんでした。

きつと姉は、私と会いたいという一途な願いを心の支えにして、消え行く命の灯を必死に燃やしていたのでしょう。

その最後の願いが叶ったことにより、姉の命の火種は燃え尽きてしまったのでしよう……。

そうして姉は、私に願いと希望を託すことで現世に悔いを残さないまま、短い生涯に幕を閉じたのです。

悲しみに打ちひしがれたまま私は呉へと帰投し、航空母艦への改造が施される日々を過ごしました。

そして時代が大正から昭和に変わって間もない昭和二年三月二十五日。航空母艦赤城として竣工したのでした。

竣工からしばらくは横須賀鎮守府での予備艦扱いでしたが、昭和三年四月一日。新たに編制されることとなった第一航空戦隊の配属となりました。

「航空母艦赤城、只今着任致しました!」

「あなたが赤城さんですね。初めまして。私は航空母艦鳳翔です。以後お見知り置きを」

着任した私を優しい声で出迎えてくれる艦娘。私より小柄な体躯で、全身から溢れ出る母性を感じさせてくれる彼女の名は鳳翔。巡洋戦艦から改造された私とは違い、設計当初から空母として建造された、日本初の航空母艦娘です。

「こちらこそよろしくお願ひ致します。まだまだ至らぬところはありますが、ご指導、ご鞭撻のほどお願ひ致します」

鳳翔さんの竣工は、大正十一年十二月二十七日。艦齡はそれほど離れていませんが、航空母艦としての訓練を幾重にも重ねた熟練者。色々と学ぶべきところはありません。

「はい。旗艦であるあなたの良き僚艦として精一杯務めさせていただきますね」

終始堅苦しい受け答えしかできない私に対して、優しい声で対応してくれる鳳翔さん。こういったところにも、年の功を感じさせてくれますね。

「その件なのですが、私が鳳翔さんを差し置いて旗艦を務めても良いものなのでしょうか？」

何年か訓練を積み重ねた後ならともかく、竣工から一年足らずの未熟者が旗艦を務めるなど畏れ多いと、私は鳳翔さんに不安げな声で訊ねてみました。

「それだけあなたへの期待が高いということなのでしょう。私は僅かな数しか艦載機を搭載できませんが、赤城さんは私の倍以上搭載できますので」

空母としての規模はあなたの方が上です。だから胸を張って旗艦を務めてくださいなと、鳳翔さんは私の

不安を取り除くように励ましてくれます。

「了解しました。誇りある一航戦の名を汚さぬよう、精一杯旗艦を務めさせていただきます！」

この包容力に包まれた鳳翔さんが支えてくれるのなら、若輩者の自分にも旗艦の職務を全うすることができる。

そう思い、私は鳳翔さんへの敬意も込めて、びしっと敬礼しました。

「はい。お互い頑張りましょうね。それにしても、特徴的な飛行甲板をしていますね」

鳳翔さんにはっこりと微笑んだ後、話題を変えるように、私の右肩にかけられた飛行甲板を興味本位に見つめます。

「はい。英国の航空母艦フューリアスを参考に造られた、三段式甲板です」

私は一段式甲板の鳳翔さんに対して、三段式甲板の説明を行いました。

この甲板は、発艦と着艦を同時に行うことを前提に設計された飛行甲板です。最上段は着艦専用で、二段

目は戦闘機の発艦、三段目はその他の艦載機の発艦用という用途です。

「それは便利ですね。実戦で扱える時が来るといいですね」

戦場でどのように機能するのか楽しみですと微笑む鳳翔さん。時代は軍縮真っ只中。世界は着実に平和への基礎を固めています。国にとってはその方が良いことなのでしょう。

ですが、私は艦娘。戦うために生まれた存在です。やはり、実戦で自分の力を試してみたいという願望があります。私が華々しい戦果を挙げることこそが、竣工することなくこの世を去らなければならなかった、姉への唯一の手向けになるでしょうから。

第一航空戦隊に着任してからは休む間のない、月月火水木金な訓練の日々が続きました。鳳翔さんは良き先輩ではありましたが、やはり側に姉が居てくれたらとの思いを完全に払拭することはできませんでした。

せめて同僚に当たる艦娘がいればもう少し気分が柔らかなだけだと、思い悩む日々が続きました。

そんな中の昭和四年十一月一日。一航戦に転機が訪れました。なんと、私の先輩に当たる空母娘が配属されることとなったのです。私はその報を聞くや否や、ようやく同僚ができると胸を躍らせたものです。

「航空母艦加賀です。以後お見知り置きを」
新たに着任した艦娘の名前は加賀。冷静沈着で、物事に動じない雰囲気の子艦娘でした。

「初めまして、加賀さん。第一航空戦隊の旗艦を務めている赤城です。あなたの着任を心から歓迎します！」
私はやや興奮した声で、加賀に自己紹介をしました。旗艦として規律正しい態度で応対しなければならぬのでしようが、高揚する気分を抑えるのは難しいことでした。

加賀は旧国名。本来ならば戦艦に命名されるべき名前です。

そう——彼女もまた、私と同様条約の制限下、空母に改造された艦娘なのです。

自分と同じ境遇の子が着任したとなると、自然と好感度が増してしまいます。

「あなたが赤城さんですね。ようやくお会いすることが叶いました」

加賀さんは私に返事をしたかと思うと、すたすたと近付いて来て、唐突に私の手をぎゅっと握ったのでした。

「えっ？ えっ？」

初対面であるにも関わらず、まるで数年来の友人であるかのような親しみのある態度を取られたことに、私はあたふたと狼狽してしまいました。

「私は、あなたの姉である天城さんに命を救っていただいたようなものです」

亡くなられた当人に会うことは叶わなかったけど、その妹である赤城さんにつつと感謝の気持ちを伝えたいと思っていたと、加賀さんは心の内を明かしてくれます。

天城姉さんが廃艦処分となった代わりに白羽の矢が立ったのが加賀さんでした。

姉は亡くなったけれど、代わりに助けられた命もあった。きつと、遠い所にいる天城姉さんも喜んでくれるのでしょね。

「赤城さん。私は天城さんの代わりににはならないかもしれませんが」

少しでもあなたの側にいてあなたを支えられたらと、加賀さんは私に寄り添って来ます。

「加賀さん？」

「赤城さん。あなたの気持ちは誰よりも分かっているつもりです。私も妹である土佐と生き別れたのですから」

姉と妹という違いはあれど、共に姉妹を失い空母に改造された者同士。私たちは互いに互いを支え合う心の友なのよと、加賀さんは語りかけてくれます。

「そう。加賀さん、あなたは私を失った姉の心境なのね」

もし姉ではなく自分が廃艦となっていたら？ その境遇に当てはまるのがあなたなのね。そう思うと、私は加賀さんに姉の幻影を重ね合わせ、再会を懐かしむ

ように抱き締めてしまいました。

「加賀でいいわ。あなたの方が先輩なのだから」

加賀さんは私を拒むことなく、呼び捨てで構わないと親しげな声で語りかけてくれます。

「そうね。でも、進水はあなたの方が先だわ」

年上の後輩だなんて、奇妙な感じ。でも、悪い気はしません。年上の後輩に年下の先輩。それはまるで、お互いの欠片を埋め合うような間柄だから。二人の出会いには必然的な運命なのねと思ってしまう。

「軍歴の差は年の差で差し引き零よ。先輩後輩という間柄ではなくて、良き友として今後ともよろしくね加賀」

私は加賀からそつと離れると、右手を差し出して友情を誓い合おうとしました。

「ええ。至らぬところはあると思いますが、同僚としてお願いします、赤城さん」

加賀はこくりと頷き、私の手を取ってくれました。

こうして私と加賀は、数奇な運命で結ばれた、掛け替えのない親友となったのでした。

「はあ。上手くいかないものね」

鳳翔さんが物珍しがった三段式甲板ですが、訓練を続けているうちに色々と欠陥が浮き彫りになってきました。

真ん中の甲板の両側には、近接戦闘を想定して二十センチ連装砲が配置されているのですが、これが艦載機の発艦に際し邪魔なばかりだけではなく乱流が発生することから、数度飛行訓練を重ねただけで使用中止となりました。

更には、三段目の甲板も日々進化し大型化する艦載機には対応できないと、昭和五年には使用中止の命令が下されたのでした。

竣工から僅か三年で二つの飛行甲板が役立たずの烙印を押されてしまい、私は胸中穏やかではありませんでした。鳳翔さんしか前例がなかったから仕方ないとはいえ、実用的ではない飛行甲板を与えられたのには不満しかありませんでした。

願いが叶うなら鳳翔さんのような一段式甲板が欲しいと、私の願望は日増しに強くなつていくばかりでした。

そんな中、ようやく私と加賀の飛行甲板の改造案が決まりました。

「それじゃ行つてくるわ、赤城さん」

昭和八年十月。まずは加賀が改造されることになり、加賀は私に挨拶して一航戦を去ろうとします。

「行つてらっしゃい、加賀」

私は加賀との再会を楽しみつつ見送りました。加賀の飛行甲板の改造は、十月二十日から佐世保工廠で行われ、昭和十年の十一月十五日、無事に完了しました。

「まあ！ 見違えたわね、加賀」

佐世保工廠にて改造を終えた加賀と再会し、私は感銘を受けました。一段式甲板へと生まれ変わった加賀は、心なしか以前より凛々しく映り、私も早く加賀のようにになりたいと思う次第でした。

「ありがとう赤城さん。今度はあなたの番ね」
同日。私は加賀と入れ替わるように船渠に入ること

となりました。私の改造で培われた技術が活かされればいいのだけれどと言ひ残し、加賀は船渠を後にするのです。

早く改造を終えてまた加賀と一緒に航行したい。そう思いながら船渠での日々を過ごしていた昭和十二年。盧溝橋での衝突以来関係が悪化していた中華民国国民党との間で、本格的な戦闘が勃発しました。

支那事変と呼称されたこの戦乱に際し、加賀には出撃命令が下され、上海方面へと向かったのです。

「はあ。また加賀だけの出撃なのね……」

またというのは、これより前の昭和七年に勃発した上海事変の際も、鳳翔さんと一緒に出撃したのです。

この時も私は運悪く横須賀海軍工廠の船渠に入渠中で、出撃することが叶いませんでした。

戦場で華々しい戦果を挙げた加賀の話聞き、私も戦場での奮戦を夢見たものですが、またしても出撃の機会を失ってしまったのです。

実践を重ねることで、加賀の練度はますます高まっています。友人が経験を積み上げるとは喜ばしい

ことですが、このまま未経験だと一方的に差が開くだけです。

こちらの都合で戦争を始められないので仕方ないことですが、早く改造が終わって前線へ躍り出たいと、私は先走る気持ちを抑え切れませんでした。

「ようやくね！」

昭和十三年八月三十一日。やっと一段式甲板への改造が終わり、同年の十二月十五日には部隊へと復帰しました。翌年一月には私にも出撃命令が下され、念願の戦場へと舞い出ることが叶ったのです。

……ですが、私に与えられた任務は海軍陸戦隊の支援で、それも一週間足らずで内地への帰投命令が下されました。

意気揚々と出撃したのにも関わらず空振りに終わってしまい、私の気分はかえって悪くなるだけでした。

ひよつとしたらこのまま空母としての本領を發揮する機会も永遠に巡って来ないのではないかと？ そんな被虐的なことを思うほどまでに私の不満は溜まっており、爆発の一步手前と言っても過言ではありません。

した。

この鬱屈とした現状から解放されたい。そのためにはとにかく戦うしかないんだと、私はより一層戦争を渴望したのでした。

昭和十六年七月。我が国が行った仏領インドシナ進駐に対して反感を抱いた米国は、翌月には対日石油全面禁輸に踏み切りました。これにより我が国の石油は枯渇の危機に瀕し、状況を打開すべく南方の資源地帯への進出が計画されました。

しかし、南方への進出を行うには、ハワイ真珠湾に在泊する米軍艦隊が脅威となります。作戦遂行中、米軍に背後から撃たれてはたまりありません。

よって、南方資源地帯への進出を円滑に行うため、米軍艦隊を一時的に機能不全にさせる必要性が生じました。

堅牢な真珠湾を正攻法で叩くのは困難を極めます。そこで、空母機動部隊を率いて真珠湾を奇襲攻撃する

計画が考案されました。

その計画を耳にした私は、胸を躍らせました。ようやく本格的な戦闘ができる。しかも相手は、長年帝國海軍が仮想敵としていた米軍艦隊。これほどの晴れ舞台があるかと、私は作戦が決行される日を心待ちにしておりました。

真珠湾を攻略するにあたり、航路は商船などの通らない北緯四十度から四十五度にかけての北方航路が選定されました。

ただでさえ遠方のハワイまで迂回して進撃する関係上、参加艦娘は速力と航続力が重視されました。戦艦は高速戦艦の金剛型、重巡洋艦は利根型。そして要となる空母は加賀、それに新米である五航戦の翔鶴と瑞鶴。

……私は航続力の関係上から、当初参加艦娘からは外されたのでした。

「作戦の成功には確実性が必要です！空母機動部隊を出し惜しみすることなく、全力投入すべきです!!」私は強く訴えました。正規空母娘三人では心許ない。

私に蒼龍、飛龍を含めた六人全てを参加させるべきだと。

六人全ての投入を渋る気持ちが理解できないわけはありません。真珠湾攻撃は、一か八かの奇襲。もしも失敗すれば、機動部隊の壊滅は免れない。

ですが、ここで参加できなかったら、私はまた戦う機会を失ってしまう。戦争が激化すれば出撃の機会はあるかもしれませんが、私にはもう闘争心を自制する余裕がありませんでした。

その後私の熱意も通じてか、計画は変更され、正規空母娘六人全員の参加が叶いました。そして私は、機動部隊の旗艦を務めることとなりました。

「ようやくよ、ようやく戦えるわ!!」

不参加から一転、旗艦の誉れを受けて私は有頂天になったのでした。

「よく来てくれたわね」

十一月十六日。出撃を前に大分の佐伯湾に停泊していた私は、第七駆逐隊の潮と漣を招致しました。

奇襲攻撃時の損傷具合に応じて、帰路は北方航路で

はなく、内地への最短距離であるミッドウェー近海を航行しなければならなくなる可能性がある。

この場合、ミッドウェー基地の航空戦力が脅威となるため、同島の基地能力を一時的に抑えなくてはならない。

このため、ミッドウェーを攻撃する必要性があり、その部隊に抜擢されたのが、潮と漣だったのです。

「万が一に備え、あなたたちの作戦は重要よ。駆逐艦娘二人だけでは心もとないかもしれないけど、よろしくお願いするわ」

「はっ、はい！ がっ……頑張ります！」

「キタコレ！ 漣にお任せだよもん!!」

やや緊張気味で弱気な返事をする潮に対して、漣はやたらと軽快な態度で返事を返します。

弱気なものも頼りなくて困りますが、緊張感が欠けているのも良いとは言えませぬ。

（いいえ。二人がどうこういう前に、私がしっかりすればいいだけのことです）

真珠湾の攻撃が成功すれば、彼女たちの負担は少な

くなる。そのためにも、必ずや作戦を成功に導かなくにはなりません。

そう意気込みながら私は十一月十八日〇九〇〇に佐伯湾を出港し、二十二日の〇八〇〇に択捉島の単冠湾へと入港しました。

真珠湾奇襲作戦は秘匿のうち遂行する必要があるため、艦娘たちは出港日時をずらして単冠湾を目指しました。

ほとんどの艦娘は同日に到着し、遅れて加賀が二十三日に入港し、参加艦娘の全てが集結したのでした。

そうして迎えた十一月二十六日。いよいよ私たちはハワイ真珠湾を目指し、単冠湾を出港したのでした。

ハワイ作戦参加艦娘

機動部隊

空襲部隊

第一航空艦隊

第一航空戦隊 航空母艦赤城、加賀

第二航空戦隊 航空母艦飛龍、蒼龍

第五航空戦隊 航空母艦翔鶴、瑞鶴

警戒隊

第一水雷戦隊 軽巡洋艦阿武隈

第十七駆逐隊 駆逐艦谷風、浦風、浜風、磯風

第十八駆逐隊 駆逐艦陽炎、不知火、秋雲、霞、霰

支援部隊

第三戦隊 戦艦比叡、霧島

第八戦隊 重巡洋艦利根、筑摩

哨戒隊

第二潜水隊 潜水艦伊19、伊21、伊23

ミッドウェー破壊隊

第七駆逐隊 駆逐艦潮、漣

先遣部隊

第六艦隊

第一潜水部隊 潜水艦伊9、伊15、伊17、伊25

第二潜水部隊 潜水艦伊1、伊2、伊3、伊4、伊5、伊6
伊7

第三潜水部隊 潜水艦伊8、伊68、伊69、伊70、伊71
伊72、伊73、伊74、伊75

特別攻撃隊

潜水艦伊22、伊16、伊18、伊20、伊24

特殊潜航艇×5

要地偵察隊

潜水艦伊10、伊26

第二章・ハワイ作戦くトラ・トラ・トラ！く

暗号電文を受信して以降、日に日に決戦の地へと近付くに連れ、機動部隊の戦意は高揚していくばかりでした。

そんな最中の十二月六日。いよいよ開戦日を明後日に控え、私は心身を清めるという目的で、艦娘たちに真水での入浴許可を出しました。

艦娘たちは決められた順番で、輸送船に設けられたお風呂へと向かったのです。

「ふう。久々のお風呂は落ち着くわね」

他の艦娘たちが入浴を終えた後、私は一人ゆったりと浸かりました。二十六日の抜錨以来真水を節約するため入浴できなかつたので、十日振りのお風呂となります。

普段は旗艦という立場上他の艦娘たちよりも気を張っていないといけませんので、こうして一時的にせよ気を緩められるのはありがたいことです。

(ここまでは上々ね。でも、明日からは上手くいくとは限らないわ)

明日には敵飛行哨戒圏へと突入します。ここで敵偵察機に艦隊を発見されれば、奇襲作戦は水泡へと帰します。

奇襲が失敗に終われば、我が艦隊は損害を被るだけではなく、今後の作戦継続が不可能になる危険性もあります。

最悪、戦死する艦娘がいるかもしれません。みんなが再び祖国の地を踏めるよう、より一層警戒を厳にしなければなりませんね。艦隊旗艦としての責任は重大ね。

「赤城さん」

「ひゃっ!？」

突然背後から声をかけられ、私は思わず背中を仰け反らしてしまいました。

「ああ、加賀ね」

声の主は、浴室の入り口に立っていた加賀でした。てっきり既に入浴を終えていたのかと思っていました

が、まだだったようね。

「ええ。赤城さんと一緒に入ろうと思って」

ひよっとしてこれが最後になるかもしれないからと、加賀は同意を求めてきます。

「ええ。構わないわ」

輸送船内のお風呂は一人入るのがやつとの狭さです

が、私は笑顔で快諾しました。

「ありがとうございます。では遠慮なく」

加賀はこくりと頷いて、浴室の中へと入って来ます。

「身体を洗ってあげるわ」

私は一旦お風呂から出ると加賀からお湯の入った洗面器と石鹸を受け取り、自分のタオルを湯に浸した後石鹸を付け、ごしごしと加賀の身体を洗い始めます。

「ありがとうございます。でも……」

自分のタオルがあつたのにと、加賀は少し恥ずかしがった顔で呟きます。

「いいじゃない、二人の仲なんだし。これで綺麗さっぱりよ」

私は戸惑う加賀に遠慮することなく擦り続け、身体

中の垢を取り除きました。

加賀の身体を洗い終えると、まず私が入り直し、続けて加賀が私の対面に腰掛けるように入浴します。

「ふう。入って来たのが加賀で助かったわ」

私はうーんと両手を組んで伸ばしながら、身体を解しました。

ゆったりとくつろぐつもりが考えごとをしてしまい、いつの間にか肩に力が入ってしまった。

これが他の艦娘だと先輩後輩や上司部下の間柄になつてしまうので、気を張り詰めたまま入浴を続ける羽目になつていたところでした。

「いえ。赤城さんのお役に立てたのなら、何よりです」

湯に浸ったせいとか、普段より紅潮した顔で加賀が語りかけてきます。

「ねえ、加賀。作戦が無事成功して内地へ帰投できたから、今度一緒に温泉にでも行かない？」

唐突に私は提案しました。作戦の成功と休養を兼ねて、広い温泉にゆったりと浸かるのも悪くないんじゃないかと。

「戦争が始まれば休む暇などないと思いますが、名案です」

機会があれば是非一緒にしたいですと、加賀は快く頷いてくれました。

「ありがとう、加賀。どこか行きたいところはあるかしら?」

「そうですね……。可能ならば、伊豆の温泉に行ってみたいです」

しばらく考え込んだ後、加賀はゆつくりと口を開きました。

「伊豆ね。悪くはないわね。横須賀からも近いし」

命令で横須賀鎮守府に赴いた際、ふらっと立ち寄るのには最適な場所の一つです。

「それもあります、何より伊豆の温泉なら天城山を眺められますので」

「あっ!」

そうでした。伊豆半島には天城姉さんの名前の由来となった天城山があります。二人で天城さんの名前の由来となった山を眺めながら温泉に浸るのもいいので

はないかと、加賀は提案して来ます。

「ええ。いいわね。天城山を展望しながら入浴するのは」

私は満面の笑みで相槌を打ちました。こういうことで天城姉さんを話題に絡めてくるあたり、やっぱり加賀は私のことをよく理解してくれているのねと、深い友情を感じずにはいられません。

姉を失って同型艦がいなくなった私にとって、気兼ねなく話せるのは加賀だけ。

きつと加賀がいなかったら、今回の作戦もどこか物寂しさを感じていたことでしょうね。

作戦を無事完遂させ、二人で一緒に天城山を眺められる温泉に行く。そんな他愛ない約束を交わしつつ、私たちは一緒にお風呂から上がったのでした。

「ふー。いい湯だったわ」

入浴後、私は高揚した気分食堂に向かいます。入浴後は作戦の成功を祝うささやかな宴会を催すことと

なっていました。

「楽しそうにしていますが、赤城さんのお目当てはお酒じゃないですよね」

「ええ。お酒も悪くないけど、やっぱり白米よね！」

私は目を輝かせながら力説します。出港してから今日に至るまでも食事の機会はありましたが、食べられる量は決まっていましたので。

宴会の名目でお腹いっぱい食べられるのは、至福の極みです。

「赤城、加賀、遅いよ。もうみんな待ちくたびれちゃってるよ」

食堂に赴くと、蒼龍が私たちを出迎えてくれました。

「それでは、明後日の作戦成功を祈り、乾ばーい！」

飛龍が音頭を取り、宴会は賑やかに始まりました。

「いい？ 駆逐艦のみんな、明後日は空母の皆さんをしっかりと守るんだよ！！」

第一水雷戦隊旗艦である阿武隈は、自分の部下に当たる駆逐艦娘たちに身を引き締めるよう訓示を伝えました。

「もちろんよ！ 最新鋭駆逐艦陽炎型の実力、とくと見せてあげるわ！ ねっ、みんな！」

一番艦である陽炎は領きつつ、同型艦である不知火たちに同意を求めます。

「ええ。実戦でのご指導ご鞭撻、よろしくお願いします、阿武隈さん」

「了解です。己の身を挺してまでも守り抜きます」

「まっかせといて！ 陽炎型末っ子として精一杯頑張るわよー！！」

元氣よく返事する秋雲に対して、不知火と浜風は生真面目な声で返事します。

同型艦でも反応が個々に異なるのは興味深いですね。

「はっはっは！ 案ずるでないぞ。決行日は吾輩たちの水偵がしっかりと索敵を行う。敵に先手を取られる心配はないぞ！！」

他の重巡洋艦娘より偵察機を多く搭載可能な利根が、心配無用と大声で笑いながら阿武隈の頭をくしゃくしゃと撫で上げます。

「わああ！ あんまり触らないでくださいよお！ ああ

たしの前髪崩れやすいんだから!!」

可愛がる態度の利根に対して、阿武隈は本気で嫌がります。ですが、駆逐艦の子たちが目を見開いて自分を見ているのに気付くと、阿武隈は顔を赤らめながら平静を取り戻します。

駆逐艦娘たちをまとめる立場上、情けない姿を見せたくないのですが、そういった態度の変わり様の子供っぽくて可愛らしいと思ってしまうですね。

「はあ。せつかくの晴れ舞台だつて言うのに、戦闘に参加できないのは残念ね」

みんなが盛り上がっている中、一人霞は不満そうな声で呟きます。霞は本隊より分離するこの輸送船の護衛を務めるため、真珠湾の奇襲攻撃には不参加となります。

「そうめげないで。護衛も大事な仕事」

他の駆逐艦の子だつて空母のみなさんの護衛が主任務。対象は違えど守ることに変わりはないと、霞と共に輸送船の護衛を務める暇が慰めます。

「ノープロブレムです！ 例え敵艦が迫つて来たとし

ても、私と霧島がバーニングラブ！ って感じに一掃しちゃいます!!」

参加艦娘で最年長の比叡さんは、やや酔った勢いで長女である金剛さんの物真似をしながら活気付きます。

「あの、比叡お姉さま。いくら宴会の席だとはいえ、少しは年長者としての尊厳を……」

その比叡さんを、傍目で眼鏡を曇らせながら霧島さんが苦言を呈します。その光景を見て、私はあり得たかもしれない未来を夢想してしまいます。

そう——本来私は天城型巡洋戦艦として竣工される予定でした。つまり私は比叡さんとまったく同じ立ち位置だった可能性があります。

天城姉さんの真似をしながら末妹の高雄に注意を促される光景。そう思うと、比叡さんたちのやり取りには羨望の眼差しを向けてしまいますね。

「赤城先輩！」

「!?!」

夢うつつな感傷に浸っている最中、突然声をかけられ、私は背中を仰け反らしてしまいました。

「あの、赤城先輩？」

声の方に視線を向けると、そこには一升瓶を持った瑞鶴の姿がありました。

「えっ、ええ。何かしら瑞鶴」

私は落ち着きを取り戻しつつ、瑞鶴に応じます。

「はい。決戦前に一度先輩方に挨拶しなきゃと思いますして」

こうして他の空母娘たちにお酒を注ぎながら挨拶回りしていると、瑞鶴は語りかけて来ます。

「そう。殊勝な心掛けね。でもね瑞鶴」

私はお酒よりこつちが好みよと、私は徐に空になった茶碗を取り出します。

「あの、それは？」

一体何を分けたらいいのか分からず、瑞鶴はきよとんとします。

「見て分からないかしら？ 赤城さんはご飯が大好物なのよ」

気が利かない娘ねと、私の隣に座っている加賀が鋭い目つきで睨みます。

「しっ、失礼しました!!」

瑞鶴は失敗したと慌てふためきながら、私の前から立ち去ります。

「加賀。新米なんだからあまり厳しく当たっては駄目よ」

瑞鶴への態度が少しきつかった感じがしたので、私は苦笑しながら語りかけます。

「いいえ。厳しいくらいがちょうどいいです」

五航戦は就役間もない空母娘。技量は私たち一航戦はおろか二航戦にも遠く及ばない。

開戦すれば戦いは熾烈を極めるのは必然。今回のように私たちと一緒にではなく、五航戦だけで出撃することもあるだろう。

そんな時技量不足で作戦を失敗に終わらせないようにするためにも、今作戦を経験することで練度を上げてもらわねばと、加賀が持論を展開します。

「成程。加賀らしいわね」

この中で実戦経験があるのは加賀だけ。それだけ戦争の厳しさを知っているのだから、甘えは許されない。

加賀なりに後輩を氣遣っているのねと思うと、自然と笑みが零れてしまいます。

「えっ、ええと……」

瑞鶴はおひつがどこにあるのかと、宴会場を探し回ります。

「瑞鶴、これよ」

そんな瑞鶴に、優しい声で翔鶴がおひつを手渡しします。

「あっ、ありがとう翔鶴姉！」

おひつを受け取り、満面の笑顔を翔鶴に向ける瑞鶴。その姿を見て、私はまたもや姉のことを想ってしまいます。

（いいわね。姉妹艦空母は……）

もしも天城姉さんが生きていてくれたのなら、私もあんなやり取りしていたのねと、しばし想像の海へと浸ってしまいます。

「赤城さん」

「ああ、加賀。ごめんなさい。私ったらまた」

加賀に呼びかけられて現実世界へと帰り、私は深謝

します。

「やはり羨ましいですか、あの二人が？」

「ええ。もしも姉が生きていたらって思うわね。でも」その世界に加賀はいない。姉は思い出の中の存在であるのに対して、加賀は掛け替えない戦友。今では加賀と過ごした時間の方が圧倒的に長い。

「姉の存在を願うことは、あなたと過ごした日々を否定することになる。姉と過ごす日々は夢。夢は夢で楽しいものだけど、いつまでも夢うつつに浸っているわけにはいかないわ。今大切なのは、この困難な現実をどう切り抜けるかよ」

だから明後日の作戦は改めてよろしくねと、私は加賀の手をぎゅっと握りました。

「そんなこと、言われなくても分かっています。……」

ありがとう、赤城さん」

加賀はいつもの無表情な顔で頷いたかと思うと、僅かながら微笑んで私に感謝の言葉を送ってくれました。加賀がこんな表情を見せるのは、私の前だけ。それだけ私たちの絆は深いものなのね。

「赤城先輩、お待たせしました！」

そんな時、あたふたしながら瑞鶴が戻って来ました。

「大盛りで頼むわね、瑞鶴」

「はい！」

瑞鶴は元気な声で返事をして、山盛りのご飯を分け
てくれました。

「ありがとう。明日はよろしくね、瑞鶴」

「はい！ 明後日は先輩たちの足を引っ張らないよう、
精一杯頑張ります!!」

瑞鶴はしゃもじを持った手でびしっと敬礼してくれ
ました。真面目な顔つきなだけに、しゃもじを持った
ままの敬礼が微笑ましく思えてしまいます。

「それでは失礼します！」

瑞鶴は深々と頭を下げ、私の元を去ろうとします。

「待って、瑞鶴！」

立ち去ろうとする瑞鶴を、私は呼び止めます。

「赤城先輩、何か？」

他に言いたいことがあるのでしょうかと、瑞鶴が真
剣な顔で私を見つめます。

「瑞鶴。翔鶴を、あなたのたった一人の姉を大切にね」
技量として未熟なところがあるのは仕方がないわ。
でも、姉である翔鶴を守ってあげることは最優先で行
いなさい。

そう私は真剣な眼差しで瑞鶴に助言をしました。

「はい！ もちろんです!!」

瑞鶴ははっきりとした声で返事をして、私だけじゃ
なく翔鶴姉のことまで気を遣ってありがとうございますま
すと頭を下げ、私の元を去って行きました。

（天城姉さんはもういないわ。でも……少しくらい夢
を見てもいいわよね？）

大切な姉を命懸けで守る。それは私がしたくてもで
きなかったこと。

だからせめて、瑞鶴には私ができなかったことを実
現して欲しいし、何より姉を失う悲しみを背負って欲
しくはない。お節介かもしれないけど、私はそう瑞鶴
に願いを託さずにはいられませんでした。

そんなこんなで宴会は夜遅くまで行われ、十二月六
日は過ぎ去ったのでした。